

ネイチャー高知

No.64 2025年1月31日発行

西日本のバイカモを調査して

稲垣 典年

現在の分類ではバイカモに含まれていますが、1988年に新変種ヒルゼンバイカモが発表されています。文献によると浮葉をもたず、沈水葉が長く8cmを越え、葉柄も3cm近くになる長いタイプで、中国地方～兵庫県に産するとあります。2024年の夏、岡山県の状況について、あわせて西日本のバイカモ類について調べる機会を得ました。

兵庫県では5カ所、岡山県で8カ所、鳥取県で3カ所、広島県で3カ所、島根県で1カ所、また福岡県、熊本県でも各1カ所ずつ観察しました。このうち兵庫県で1カ所、岡山県で5カ所は自生地が失われていました。

あちこちで葉を比べましたが、バイカモとヒルゼンバイカモの中間的なものが多く見られ、明確に区別できるものではないことがわかりました。極端に言えば分ける意味はないかもしれない。分からないなりに、この度調査した範囲では、岡山県中部より西、広島県西城町あたりまでヒルゼンバイカモは見られるようでした。東側は中間的で判断しにくい。島根県と九州のものはヒメバイカモでした。

福岡県ではブロックを組んでビニールシートを敷いた人工の水路に川の水をポンプアップして保護・管理していました。兵庫県では川から引いた三面コンクリート張りの農業水路の底に、数mおきに穴をあけて砂を入れ、バイカモを植栽していました。ここでは毎月第1日曜日に住民総出で水路の掃除を行っているようで、溝さらいしたあとの砂が道路に寄せられていました。島根県や兵庫県の日本海側では地元高校生と共働で、また岡山県では漁業関係者が、流域の株を移植するなどの保全活動が行われているそうです。

今回バイカモがなくなった場所は、豪雨による洪水や水温の上昇など気候の変化、また帰化植物との置き換わりが原因と思われるものもありましたが、水面が草に覆われて見えなくなっているところも多くありました。例えば水田をやめたら畦に生える草原植物はもちろん、水田に引く水路も利用しないまま放ったらかしになることで水路に暮らす植物もだめになるでしょう。日本全体が人口減で、どうしようもないことですが、今回の調査でそれが目に見えたことでした。



福岡県の保全地区



兵庫県の水路



左からヒルゼンバイカモ、バイカモ、ヒメバイカモ

わたしのフィールドノート

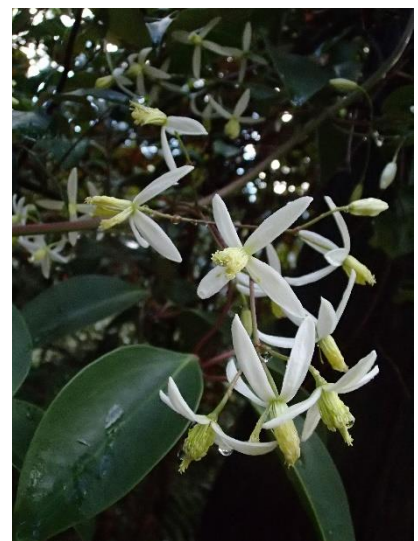
初雪の中の花見 ヤマハンショウツルの開花

田城 光子

2024年の夏は暑かった。例年であれば8月も終わりにちかくなると、「……風のおとにぞおどろかれぬる」と和歌にも詠まれているように、一瞬秋の風を感じることもあるのに、それもなく、12月なかばには突然冬がやってきた。12月14日、麓ではしぐれていたが、三原村にあるヤマハンショウツルの自生地に向かって出発した。恒例の観賞会には、県内外から多くの参加者が集まった。

ヤマハンショウツルは亜熱帯の照葉樹林などの林縁に生える、大型のつる植物である。中国南部、台湾、屋久島、種子島、鹿児島と宮崎の限られた地域に分布し、個体数もあまり多くはないようだ。2010年、宿毛市にあるほたる湖の奥の林内で四国では初めて発見された。川をはさんだ三原側の山や今の山の麓にある国有林でも次々に確認された。その後中土佐町の山林でも見つかっている。中でも三原村ぬたお山には約130個体ちかくが群生し、全国的にも最大級の生育地ではないか、と言われている。三原村は周りを山に囲まれた、標高120mを超える高原の村であり、足摺半島からも今の山で遮られており、亜熱帯とはほど遠い気候である。どのようにしてこの地に侵入し生育してきたのか、まだわかっていない。国有林は植林後50年以上を経過しており、伐採の時期を迎えている。このような人工林の中に、真冬に花を咲かせる植物が生えているとは、長年調査を続けてきたわたしたちも驚きであった。

地元の有志が集まり、調査をすることになった。まず、この植物の特徴を知ることから始めた。ヤマハンショウツルは常緑の大型つる植物である。つるはコルク質が発達し深い溝がある。フジなどのように他の植物には巻き付かず、まるでロープを垂らしたように垂れ下がり、大きな樹木の樹冠まで伸びててっぺんで花を咲かす。花は12月に咲き、クリスマス頃が見ごろである。この時期に、まず遠くから山全体を見渡してみる。雪が降っていないのに一部綿帽子をかぶったようなところがあれば、それがヤマハンショウツルの開花である。遠望することで位置を特定する。赤みをおびた長い葉柄の先に、光沢のある三小葉の葉がつき、ムベに似ているがとても美しい。花はセンニンソウをやや大きくしたくらい、花糸にひだがたくさん出ているため華やかで見ごたえがある。3~4月になると果実にたくさんの白い仙人の



ヤマハンショウツルの花
撮影：坂本彰



初雪をかぶったヤマハンショウ
ヅル 撮影：富本敦子

髭のような毛が生え、花の時期と同じように綿帽子状となるため、遠くからでも見つけやすくなる。

異常気象と言われた 2024 年であったため、開花が心配されていたが、観察しやすい場所でいつものようにちゃんと花を咲かせてくれていた。麓でのしぐれが、山に入るとぼたん雪になった。降りしきる雪の中で、カンザブロウノキは一段と神々しく、谷を埋め尽くすほどに群生しているトサムラサキの果実の紫も輝きを増した。登山道には足をふみだすのをためらうほど、フデリンドウが大群生している。一昔以上も前のこと、今の山頂上に向かう稜線上の道端で、ひとまわり小さくて白い花のフデリンドウを見たことがある。この中に白い花を咲かせるフデリンドウがありはしないか？春になったら確かめにこよう。この日出会った植物はどれも美しかったが、やはりひとき

わ輝きをはなつたのは、雪よりも白く咲いているヤマハンショウヅルだったと思う。初雪をかぶったヤマハンショウヅルの花見は、なんとも風流なものではあった。

気候変動、森林伐採、風力発電の建設計画など、植物たちの生きる環境は厳しくなっている。

山を下りた後、参加者と弁当を食べながら、そんな話もできた。有意義な一日であった。

2025 年 3 月の観察会

スミシと早春の花観察会

日時 2025 年 3 月 29 日(土曜日) 午前 9 時から 11 時 30 分(予定)

場所 高知市筆山・皿ヶ峰周辺

9 時に筆山第 2 駐車場(皿ヶ峰登山口近くの駐車場)に集合

講師 細川公子さん

持ってくるもの メモ用具 あれば図鑑

参加費 無料

定員 20 名(先着順)

その他 雨天中止です

参加希望者は事前の申し込みをお願いいたします。

高知の植物化石（5） ソテツ目ニルソニア科

三本 健二

ジュラ紀後期～白亜紀前期の領石型フローラには、ソテツ目の植物としてニルソニア科の葉化石が多産する。

特徴は、葉身が葉軸の上面を覆っていること。そのため、葉軸は葉の裏面では見えるが、葉の表面では見えない。葉脈は、葉軸にほぼ直角な平行脈。

高知県の白亜紀の地層からは、次の2種が図示・報告されている。

1 ニルソニア・カナデンシスに比較される種 *Nilssonia* sp. cf. *N. canadensis*

葉は比較的幅広い。種小名は発見地のカナダに由来する。

私が中学生だった1970年代には、ニルソニア・オリエンタリス *N. orientalis* と呼ばれていた。

次ページに示す写真の標本は、1987年に南国市領石で採集された。

その年、領石で植物化石が多産してマスコミ報道された。県が採集・保存することになり、平田茂留（もとめ）氏から県に寄贈された動植物化石を所蔵・展示している牧野植物園が実施した。私も高知化石研究会会員として採集に参加した。採集の成果として2つの新種発見があり、記者会見も行われた。

この時新たに採集された化石は、『化石館化石目録』の編集を行った私が標本登録を行った。標本番号は、平田氏寄贈標本の最後の番号（18041）に続けて付番した。

2 ニルソニオクラドス・ジャポニクス *Nilssoniocladus japonicus*

葉は細長い。次ページに示す写真の葉は裂片に分かれているが、裂片に分かれない葉もある。

1970年代にはニルソニア・シャウンバージェンシス *N. schauburgensis* と呼ばれていた。種小名は、発見されたドイツの地名に由来する。その後、その種群に属するものという意味で *N. ex gr. schauburgensis* と表記された。

ニルソニアは葉に与えられた属名であり、その葉が幹に付いた化石にはニルソニオクラドスという属名が付けられている。幹に付いた葉が見つければ、ニルソニアからニルソニオクラドスへと属が変更される。

ニルソニア・シャウンバージェンシス種群とされていた葉化石は、幹に付いた化石が福島県で発見され、1997年にニルソニオクラドス・ジャポニクスという新種が設けられた。高知県産の白亜紀の葉化石も、それと同種だと考えている。



Nilssonia sp. cf. *N. canadensis*
牧野植物園所蔵 No. 18058
南国市領石産，長さ約 17cm



Nilssoniocladus japonicus
牧野植物園所蔵 No. 10578
南国市下八京東郷谷産，長さ約 11cm

文献

高知県立牧野植物園. 1981. 化石館化石目録. 114p.

三本健二. 1988. 高知県領石で植物化石多産（1987年）. 地学研究, 37(7-9): 183-190.

三本健二. 2024. 領石の植物化石の研究史. 南国史談, (47): 2-6.

Ohana, T., Kimura, T. & Kawazoe, A. 1989. Some fossil plants newly found from the Lower Cretaceous of Kochi Prefecture, in the Outer Zone of Japan. *Asian Journal of Plant Science*, 1(2): 53-68.

Takimoto, H., Ohana, T. & Kimura, T. 1997. Two new *Nilssoniocladus* species from the Jurassic (Oxfordian) Tochikubo Formation, Northeast Honshu, Japan.

Paleontological Research, 1(3): 180-187.

気ままなカメラ日記

久川 信子

皆様、2025年もどうぞよろしくお願ひいたします。16名の新規入会の方々も迎え、交流も楽しみにしております。お気軽にお声がけいただけますと幸いです。

今回はいつものスタイルはお休みにして、嶺北香美ウィンドファーム事業計画の問題でサシバの繁殖の内容にて意見書提出の提案もあったことから、里山に関する内容とさせていただきます。ご存知の方も多い内容で恐縮ですが、最後までお付き合いいただけましたら幸いです。

昨年、日本鳥類保護連盟のGPS調査にてサシバの渡りのルートが明確になり、高知は重要な中継地点であることが明らかになりました。海を渡るサシバは、高知の里山でエサを捕り、何日も休息した後に再び旅に出ます。このGPS調査と同時進行で私もサシバの繁殖行動を調査していました。このGPS調査の報告が発表される度に心が躍りました。

サシバの繁殖行動に関する調査

はじめに

3年連続で3月下旬に、のいち動物公園上空から野市町みどり野方面にサシバ (*Butastur indicus*) が降りるのを確認。さらに毎年夏に三宝山で若鳥を確認していることから、サシバの繁殖の可能性が高いと判断し調査を開始した。知人のバーダーの協力を得て、主な観察者は私を含め4名となった。

調査方法は、目撃ポイントおよび飛翔経路を地図にマークし、写真と動画を撮影して記録した。これにより、繁殖地を特定しデータを収集した。結果は以下のとおり。

飛来

春の渡りで3月24日にみどり野に飛来。田んぼのカエルを捕食しながら休息。(以下、繁殖地保全のため地名は記載しない。) 以後、里山の棚田などで目撃するようになる。

営巣

巣は確認せず。(営巣放棄が懸念されるため冬期に探すこととした。)

繁殖環境

山の谷沿い。森林に面した水田・畑・雑木林などがある里山。

5月下旬~6月初旬

里山で飛行が確認されるのはオスばかり。メスの確認は1度のみ。

育雛

孵化初期、親鳥は交代で雛に餌を与えるが、6月中旬より両親で給餌を行っていた。7月6日に、巣立った幼鳥を確認。親から給餌を貰いつつ飛行や採餌の練習を開始した。餌は、ヘビ・トカゲ・カエル・セミ(後半はセミの確率が高め)

繁殖成功

観察番の繁殖成功は3個体確認。7月14日に谷を舞う幼鳥3羽と成長オスを確認した。(この時期、成鳥メスは換羽が本格化していてすぐに見分けが出来た。)

7月17日の午前、幼鳥2羽と成鳥メスが旋回上昇をし、そのまま谷には戻らず。翌日残り幼鳥1羽と成鳥オスが旋回上昇。20日成鳥オスが谷に戻るが幼鳥が戻らないことを確認したのか約5時間後に谷を去り、この日が最後の目撃となった。

冬期の巣の搜索結果

巣立った幼鳥が止まり木としていた場所から観察初期に林の中に消えた成鳥メスを確認していた場所までは直線にして約 390m。この区間に 4 カ所で巣らしき形跡を発見したが、断定は不可能だった。巣として一番形が残された場所は 180m離れた場所であるが、実際にサシバが営巣で座っているのを確認しないと今季の巣と判断することは出来なかった。すなわち今回の調査の正しいデータ部分は巣立ちからとなる。しかしこの先は、さらなる注意が必要。先輩方にも相談し慎重になるべきであることには違いない。

その他

上記の観察番の場所から 1,800 メートル離れた場所で確認していたサシバの成鳥は別の番であった。明らかに眉が違い個体識別できた成鳥と若幼鳥を確認。同じように棚田のある里山である。とりわけカエルの存在は改めて重要だと再認識した。カエルが多いということは昆虫も爬虫類も比例して多い。水田(水路周辺も含む)が里山の生物多様性を保っているのである。共通の鳥類(ハチクマ、サンコウチョウ・アカショウビン・ミソゴイ・クロツグミ・オオルリなど)

日本には四季があり、春から夏にかけて昆虫や両生類・爬虫類が一斉に発生します。日本の里山は世界的に見てもとても重要で貴重な場所なのです。しかし、サシバの数が減少しているのは、人為的な過度な開発が主な原因とされています。人口が減少する中で、再生エネルギーを理由に自然を破壊する巨大風車の建設は、過剰な開発と言えるでしょう。これに反対することで、サシバを含む多くの生き物の生態系を守ることができると信じています。

最後に、今回観察記録をまとめた動画「サシバの繁殖をとおして考える 里山の生物多様性」を高知県立のいち動物公園の YouTube で見ることができます。対象年齢を小学高学年から設定して制作しました。よろしければご覧ください。URL は次のとおりです。

https://www.youtube.com/watch?v=_9gO8XLFIXs

スマートホンの場合は下の QR コードからご覧ください。



親の帰りを待つ幼鳥

朝倉城址城山の植物 バショウ

坂本 彰

朝倉の朝倉城址は元の山城の形状が良く残っているとされるが、それでも裾の方は開墾され畑になっている。その畑の脇にバショウ *Musa basjoo* Siebold ex Y.Tanaka et Ono が生えている。もちろん、自生でなくて植栽されたものであろう。その姿から、バナナの仲間であることは容易に想像できる。まさに Japanese banana である。

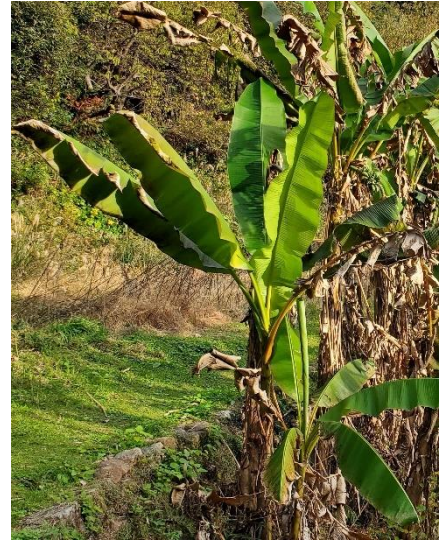
バショウは結構あちこちで見かける。全県的な生育状況を見ようと高知県植物誌を開いたがバショウは掲載されていない。山中目録にもない。観賞用に栽培される種でも、逸出し野生化している場合には植物相調査の対象になると思うが、バショウの場合はほとんど種子をつくらないとのことなので、逸出もないのであろう。山間部では栽培放棄され、野生状態のものも見かけるが、あの大きさの葉を押し葉標本にする方法が思いつかず、採取は見送っている。

バショウは栽培される植物であることから、めったに使わず本棚でほこりをかぶっている園芸大百科事典で調べてみた。この本では著者（命名者）を Sieb. et Zucc.としている。横道にそれるが、バショウ *Musa basjoo* の命名者については図鑑、文献によって異なっている（例えば昭和49年発行の牧野新日本植物図鑑では Siebold としている）。これについても時間があればきちんと調べてみたい。面白いのはバショウを無常の例えとして紹介している点である。WEB で検索してみるとやはりバショウをはかないものにとらえる傾向が強く感じられた。夏には大きな葉を勢いよく広げておきながら、冬には枯れてしまう姿から世の無常、人生のはかなさの例えとされるのであろうか。いずれの植物も今を盛りと花を咲かせる時期とそうでない時期の間には差があるが、バショウの夏の勢いのある姿と、冬枯れの姿のギャップは他に例を見ないほど大きい。

松尾芭蕉が芭蕉を詠んだ句に「芭蕉野分して盥（たらひ）に雨を聞く夜（よ）かな」がある。この意味は「野分が吹き荒れ、庭の芭蕉（ばしよう）の葉を打つ雨風の音がしきりである。家の中ではたらいを打つ雨もりの音がわびしく響いて、秋の夜のわびしさがひとしお身にしみることだとなるという（古文辞書 - Weblio 古語辞典古語辞典）。野分も芭蕉も秋の季語とのこと。夏の勢いのある葉より、風雨にさらされて破れてしまった葉がものあわれを誘うからと説明があったが、なんとなくしっくりこない。もっと雄々しい、元気なバショウを詠んだ句がないか、WEB を検索していると次の句が見つかった。こちらが断然バショウらしい句と思う。

巨花重く垂れて凜たる大芭蕉

室伏みどり



自己紹介のページ

2024年10月に開催された講習会で自然観察指導員になられ、連絡会に入会された方の自己紹介特集ページです。

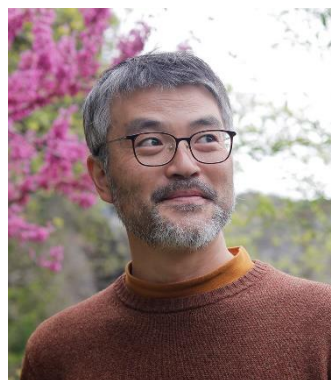
阿比留憲司(あびる けんじ)さん

本山町で現在地域おこし協力隊をしています。活動内容はアウトドア事業推進員という事で、アウトドアヴィレッジ本山を拠点にアウトドアに関わるイベントの企画やショップ店員として店舗業務などしております。今後地域に愛される帰全山公園を舞台に自然観察会を実施していければと考えています。自然観察会を実施する際、皆様のお力をぜひともお借りできればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



田村匡史(たむら ただふみ)さん

2021年に沖縄から高知に移住してきました(出身は埼玉です)。樹木が特に好きですが詳しくはなく、ただカッコイイなあと思っただけでしたが、図鑑を持ち歩いて同定しだすと世界の解像度が上がったと実感でき、興味が一気に広がりました。今では植物だけではなく、あらゆる生き物や、自然環境にも関心があります。これから自然保護や環境問題についても知識、経験を深めたい！と感じています。



普段は家族で簡単な自然観察を楽しんでいますが、工石山での指導員講習会で体験した感動や知識を元に、いかにして生き物や自然環境とお近づきになれるか、仲良くなれるか、そして子供に伝えていけるか、今まで以上に考えて精進しつつ楽しんでいきたいと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。

廣瀬奈美(ひろせ なみ)さん

自然観察指導員講習会に参加させていただきました廣瀬奈美です。一般社団法人日本樹木医会高知県支部事務局・高知県緑サポーター会事務局・幡多緑と水の会事務局を兼任しています。

樹木医として各地の相談を受け付けたり、サポーター会として環境整備ボランティアに参加したり、緑と水の会として植物観察会を行ったりと活動しています。また日本防災植物協会の会員で、防災植物料理教室のお手伝いをしたりしています。



植物の観察は大好きですが、育てるのは苦手です。指導員としては落第だと思いましたが、

勉強していきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

今年度は、高知県緑サポーター会で樹木医セミナー「樹木の診断と治療に関する知識」を6月開講予定で、準備中です。興味のある方はお問合せください。

連絡先 一般社団法人日本樹木医会高知県支部 事務局

廣瀬 奈美

Mail books05080088@yahoo.co.jp

山田光俊（やまだ みつとし）さん

小さい頃はシートン動物記ファーブル昆虫記など動物大好きでした。関西出身ですが、高知の大学を出てそのまま、居ついてしまったと言うような感じです。60代になるまで、あまり興味がなかった植物ですが、植物の専門家の知識の深さに触れて、また植物好き仲間の強い好奇心に感化され興味が湧き、また牧野富太郎ブームも相まって、牧野植物園のリピーターにもなっています。60を過ぎてからのわか研究員ですので、植物の名前を覚えては忘れ、忘れては覚えるといった事で、毎日が新鮮と言えば新鮮ですが、もの忘れと毎日戦っております。遠目が利き稀少植物をめざとく見つけ、家庭菜園を実践してきた奥方に負けられないように頑張ります。学習効果が低く、何度も同じ事を聞きますが、そこところ、なにとぞご容赦ください。



山本あやみ（やまもと あやみ）さん

2024年10月に工石山で自然観察指導員講習を受け、連絡会の仲間入りさせていただきました山本あやみです。とはいえ、まだそれらしい活動はできていませんが、まずは自分自身が楽しむことが一番！と、講習会でみなさんと学んだことを、普段の生活の中で身近な人たちの中で実践しています。

私にとって自然に親しむことの素晴らしさとは、「自然の中に身をおくと心と体がずっと滑らかになり心地良い」、そして「いろいろな視点・見方をしてみると新たな発見があってとても楽しい」この2点に尽きます。頭でいろいろ考えるのではなく単純に、自分自身が自然とともにあることを喜んでいるという感覚を大切にしたいと思っています。「人間はもともと自然の一員なので、自然に溶け込んでこそ、はじめて生きている喜びを感じることが



できるのだと思います。」という牧野富太郎博士の言葉があります。この言葉をいつもかみしめています。思い返してみると、小さなころから鳥に興味があって「あの胸のふわふわした羽毛を触ってみたい」とか「あの子（鳥）は誰だろう？友達になりたい」という感覚で親しんできました。そのころはただ見つめているだけでしたが、その思いが再燃し、色や特徴を覚えて帰っては図鑑をひき名前を知ってまた会いに行くということを繰り返してきたのがここ10年程です。知れば知るほど親しくなったような気がしてうれしくなります。鳥の方はたとえば、私が来ようが来まいがどうでもいいに違いなく、そこにいたかったらいるし、よそに行きたくなったら飛び立っていきます。また、環境や状況が変わればそれに応じて行動を変化させていきます。その変化が人にとって好ましいものでなかったり、地球規模の気候変動に影響されたものだったりして寂しく悲しくも感じますが、そんな素直でありのままの自然の姿はいつも魅力的で学ぶことが多くとても楽しいです。最近は興味関心が植物にも広がっています。

私はNPO 砂浜美術館に勤めています。「わたしたちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」というコンセプトのもと、頭の中で砂浜を美術館に見立てそこにあるありのままの自然や風景を“作品”と捉える、その考え方を発信しています。そこで砂浜や入野松原をフィールドに活動していますが、野鳥観察会や植物観察会も実施するようになりました。田城さんはじめ地域の先輩方にお力添えいただきいつも感謝です。私なりに、多くの人と自然の中にいる喜びや楽しみをシェアし、じわじわと仲間を増やしていく動きができればいいなと思っています。どうぞよろしくお願いします。

横山美穂(よこやま みほ)さん

「遠山を守る会」事務局の横山美穂といいます。遠山自然公園は、知る人ぞ知る希少植物の宝庫です。遠山と名前がついていますが、山ではなく、里山に続く草原と湿地です。

元々は人の手によって耕作管理されていた田畑でしたが、人が手を入れなくなって植生が変化し、ネザサが茂って希少な植物が姿を消しかけた15年ほど前に四万十町が購入。私た



ち「遠山を守る会」はそのころに結成され、年間を通じて草刈りをし、毎年2月にはボランティアを募って火入れも行って希少な植物の保護活動をしています。普段は一般に開放していませんが、定期的に観察会を開き、希少な植物を身近で観察してもらい、植物に親しみ植物を楽しんでもらっています。この秋に高知県で自然観察指導員講習会が開催されると遠山会員から紹介していただき、初めてこの会に参加しました。そして、目からうろこでした。普段遠山で観察会ガイドをするときには、開花中の希少な植物名とちょっとしたこぼれ話を提供することで精一杯でしたが、いやいや、参加者に発見してもらおうお手伝いをするのがガイドの役目ではないかと気づかされました。(違っていませんか?それも怪しいところですが…)講習会から後の遠山観察会では、少し引きでお手伝いをするのができたような気がします。といっても、その後はまだ1回しか実施していませんけれど。こんな恵まれた場所がすぐそばにあるという環境を大事に、今年もいろいろ企画していきたいと考えています。よろしくお願ひいたします。

【会員入会・退会情報】

講習会受講者で自己紹介文を投稿いただいた方以外に次の方が入会されました。敬称略。

大下宗亮(おおした そうすけ)高知市/大和卓海(おおひ たくみ)高知市/
小島ノリコ(おじま のりこ)黒潮町/片山百合子(かたやま ゆりこ)高知市/
菅野匠真(すがの たくま)高知市/高山健司(たかやま けんじ)香南市/
西谷紅葉(にしだに こうよう)土佐町/布正人(ぬの まさと)四万十市/
久武将也(ひさたけ まさや)高知市/三宅清文(みやけ きよふみ)高知市/
山口佑貴(やまぐち ゆうき)梶原町/

他県講習会受講者 南耕太郎さん(高知市)

受講者以外の新入会者 上田順一さん(佐川町)

退会

下村公水さん 大石真紀さん 坂本正彬さん

【編集後記】

新たに加入された方の自己紹介コーナーに6名の方から投稿いただきました。新しく自然観察指導員になられた方が、県下各地で多方面にわたって活動されていることがよくわかりました。活動にあたっては、連絡会との連携も図っていただければ、活動の輪が広がると思います。

今回投稿いただけなかった方、次号(7月発行予定)への投稿を期待しています。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

No. 64 2025年1月31日発行

事務局 780-8075

高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp